

○学問奨励と藩校稽古館

安永4年(1775)7代長堅のとき、後に稽古館と呼ばれ、藩校となる学問所が設けられました。長舒は、藩主となると本藩から祖來派の亀井南冥や京から山崎派の小川才次などを招き、学問を奨励しました。その後亀井南冥に学んだ原古処を稽古館訓導(後に教授となる)に任じました。向学心の旺盛な長舒は、自ら我が子連れて講義を受け、更に家老や諸役人に至る家臣たちにも広く講読させました。また、兵学をはじめあらゆる武芸を奨励し、熟達した藩士に師範役を命じ、指導に当たらせました。こうして長舒は、稽古館を、実父高鍋藩主秋月種茂の明倫堂、叔父米沢藩主上杉鷹山の興譲館に比肩する藩校とならしめ多くの人材を育成しました。

○秋月の文化を彩る俊英たち

長舒の治世の下、秋月文化の中心的存在として原古処・緒方春朔・斎藤秋圃などを輩出しました。原古処は、手塚家の二男として生まれましたが、生来の利発さと英才ぶりを儒学者原担齋に見込まれ、懇請されて原家の養子となり、家督を継ぐことになりました。その後、藩の諸奉行などを歴任し、長舒の信任を得て、稽古館の教授となり、秋月の文化・教育を大いに振興し、有為な人材を育成しました。また、長舒は原古処の意見を採り入れ、藩財政直直しとして、特に桑の栽培と養蚕を奨励していきました。長舒の学問の奨励は、医学の研究発展にも寄与しました。長舒は7代藩主長堅が痘瘡に罹り、18歳で早世したので、痘瘡を防ぐ方法を模索していました。その頃藩医の緒方春朔がこの難病と取り組み、中国の書籍の研究を続けていたので、長舒も協力し、遂にその免疫法が考案されました。春朔は、久留米の領民でしたが、医者を目指し長崎で勉強に励んだ後、長舒によって秋月の藩医に迎えられ、種痘の研究に専念してイギリスのジェンナーより6年も早く免疫法を完成させたのです。成功の陰には、上秋月の大庄屋天野甚左衛門の多大なる協力があればこそでしたが、藩主、藩医、篤志家の心がひとつになっての偉大な功績と称賛されるべきでしょう。この種痘法の成功は、秋月藩のみならず全国の医学の進歩に寄与しました。更に秋月文化の担い手として、絵師斎藤秋圃がいます。秋圃は長舒に見い出され、秋月藩御抱え絵師となりました。秋圃は、長舒主催の太宰府書画展覧会に施龍図を出品するなど、筑前絵師の中心的存在で、特に秋月時代は狩野派風御用絵のほか写生的鹿の絵の名手として知られていました。島原の乱戦闘図屏風は、秋月郷土館に、また長生寺の秋葉堂には天井絵が今に残っています。

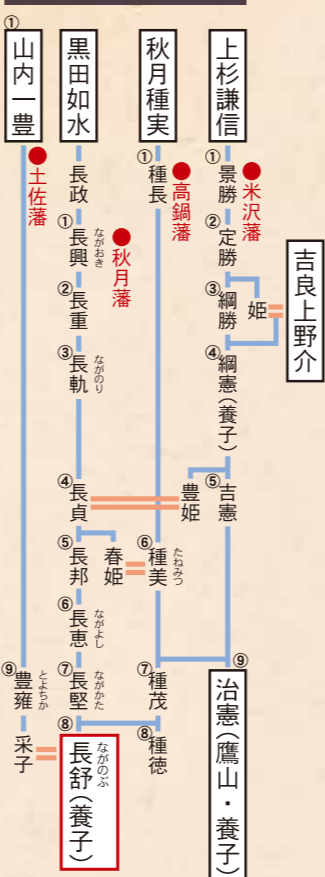
○悲願の目鏡橋完成

長舒が行った今なお残る業績に、秋月街道に架かる目鏡橋があります。7代藩主長堅の急逝による8代藩主長舒擁立に際して、秋月藩はその代償として、福岡藩が幕府から任じられていた長崎警備役を代わりに務めなければならなくなりました。その頃、筑前秋月と筑後・豊前を結ぶ木の橋は、人馬の往来も激しく橋の損傷も著しく、大洪水時には瞬時に流されてしまいました。長崎に警備していた長舒は、長崎の石橋と同じものを野鳥川に是非架けたいと熱望しました。その頃は藩財政も厳しくなりましたが、家臣や領民の要望が強まり、長舒はついに架橋建設を決断しました。ところが不幸にも竣工を目前にして橋は崩壊し、病床にあった長舒は、目鏡橋の完成を見ることなく、文化4年(1807)43歳で逝去しました。しかし崩壊から3年後の文化7年(1810)9代藩主長韶の時、悲願の目鏡橋が野鳥川に美しいアーチを描いてその姿を現しました。ただ、渡り初めのその時に、晴れやかな前藩主長舒の姿を見ることができなかったのは、家臣・領民の涙を誘うものでした。



▲目鏡橋

長舒を彩る系図



黒田家の中でも熱烈なキリシタン 黒田直之



▲黒田直之 (福岡市博物館所蔵)

慶長5年(1600)天下分け目の関ヶ原の戦いが終わると、筑前には豊前中津より黒田孝高(官兵衛)の嫡男で武勇の誉れ高い黒田長政が移って来ました。長政は、秋月の地の重要性から、筑前入国と同時に叔父黒田直之を秋月に配しました。孝高は敬虔なキリシタン大名(洗礼名:シメオン)であったことは広く知られていますが、直之も孝高のすすめによって信者となり、洗礼名をミゲルと称しました(ちなみに長政の洗礼名はダミアン)。秋月を直之が治めるようになってから、秋月は博多とともに筑前におけるキリシタン信仰の中心地となり、直之は城下に新しい天主堂を建て盛大な献堂式をあげました。こうして教会も出来たので、復活祭や主だった祝日には筑後や肥前の信徒たちまで式や祭りに参加するようになりました。こうして直之の影響は筑前全域をはじめ各地に及び、秋月は九州伝導の本拠地となり、ここを拠点として宣教師たちは筑後地方へも布教に出向き、信者数も大きく伸び、この年には2000名以上の授洗者があり秋月は大いに栄えました。しかしながら、直之は秋月に封ぜられてわずか10年にしてこの世を去りました。



▲秋月城跡出土罪標付き十字架浮文軒丸瓦 (朝倉市教育委員会蔵)

十字架の上に罪標を加え、キリストが十字架にかけられたゴルドアの丘まで表現している。

栄えある三奈木黒田家の初代 黒田一成



▲黒田一成 (福岡市博物館所蔵)

○三奈木 黒田氏の起こり

戦国時代、織田信長は、当時の常識を破る新しい政策「天下布武」のもと、天下統一を目指していました。しかし、天正6年(1578)、信長の家臣・荒木村重が離反し、有岡城(兵庫県)にこもって信長と戦うことになりました。このとき、豊臣秀吉の使者として、村重に翻意を促すため城へ向かったのが、黒田孝高(官兵衛)です。しかし逆に孝高は、城の土牢に幽閉されてしまいました。孝高の監視役を命じられた村重の家臣・加藤重徳は、監視をしているうちに孝高の奇才を慕うようになり、二人は心が通じ合うようになりました。孝高は「そなたは私の命の恩人。もし私がこの城から脱出し、再び活躍するときがきたら、そなたの一子を立派な武士として育てたい」と、重徳と約束したのです。村重は戦いが不利と見るや、妻子や多くの女房たちを残し、天正7年(1579)、近臣の数名と密かに城を脱出します。村重の脱出で孝高も城から救出され、孝高は秀吉の軍師として活躍しました。戦国時代、約束の反古や裏切りは日常茶飯事でしたが、孝高は約束を守り、重徳の次男を養子に迎え、我が子・長政と同様に養育しました。そして後に、黒田の姓を与えます。これが三奈木・黒田氏の始まりで、初代が黒田一成です。

○生い立ちと戦歴

黒田一成は、元亀2年(1571)、伊丹村(兵庫県)に加藤重徳の次男として生まれ、幼少のころは玉松と呼ばれていました。9歳のとき、孝高の養子となり、孝高の薫陶を受けて育ち、名も黒田一成(美作、三左衛門)となります。天正12年(1584)、一成が14歳のとき、長政に従い、根来雑賀の僧勢と泉州岸和田(大阪府)で勇戦します。これが一成の初陣でした。一成はその後も幾度となく出陣しますが、天正15年(1587)、秀吉の九州征伐のとき、薩摩と日向耳川の激戦で先陣をなし、高名をあげます。文禄元年(1592)と慶長2年(1597)の二度の朝鮮出兵のときも、長政に従い、後藤又兵衛とともに勇敢に戦い、「黒田藩に一成あり」といわれるようになりました。豊臣秀吉の死後、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは、長政が徳川家康に味方するや、君命を受けて、石田三成派と死闘を繰り広げ、徳川方の勝利の一因をなします。その軍功で、長政は筑前52万石の大封領を与えられました。長政は一成の偉功に対し、三奈木を中心とした下座郡(旧甘木市の一部)1万5000石(幕末には1万6000石になった)を与えます。その後も、大阪夏の陣・冬の陣に出陣し、今までの武勇をもって、最も若くして黒田二十四騎の一人に加えられました。一成は、その二十四騎の中でも、八人の剛将の一人に選ばれるほどの実力でした。

○最後の出陣、島原の乱

島原藩の松倉重政・勝家父子二代にわたる藩政は、領民へ苛酷な賦役と重税を課し、また、キリシタン弾圧などを厳しく行いました。このため領民は、寛永14年(1637)10月、天草四郎時貞を盟主として一揆を起こします。後にこの一揆は「島原の乱」と呼ばれるようになりました。

黒田氏系図

